

尾高先生を思う

十四回生 阿部 弘

尾高一郎先生の思い出を本誌に寄せるようにとの勧めを、私と同じ十四回生の柿崎君から頂きました。期待に副う一文をもって応えられるものかどうか、私のためらいは尽きません。ただ、そのためらいの理由をここであれこれ申し述べるのも本意ではありません。私はただ、尾高先生の直接の「膝下」にあった期間の、異常に短かったことだけを、理由として挙げさせて頂くに止めようと思えます。異常に短かったとはどういうことか、それについては後ほど記すところでお分かり頂ける筈であります。

また併せて、この一文が私一人の記憶の羅列に終わるものでないこと、それよりも寧ろ、先生の教室であつて私と机を共にした同期生達の先生に捧げる思いであり、また謝辞でもあるべきこと、これらを念頭において進めることを申し添えておこうと思えます。

なお、私は思い出の裏付けとして、母校の創立三十年、四十年、五十年の各記念誌、並びに昭和十二年の「学校通信」などを参考にしました。記念誌については、母校の小松校長先生のご好意を得て拝借閲覧、「学

校通信」は、私自身手元に所持するもので、かつて平成七年、東京同窓会に際して複写、配布されたものの原本に当たるものであることを付け加えておきます。さて私は先ず静かに目を閉じ、澱をなして積もる記憶の重なるの、底の辺りに身を沈め、そこに尾高先生に繋がる思い出の、例え一片なりとも見出せないものか、探ってみようと思うのです。いきおい私の入学時期にまで遡ることに成り、時として脇道に逸れますこと、どうかご容赦下さい。

私の千里第二尋常小学校入学は昭和十二年四月のことでした。雪組五十四名の受け持ちは杉浦先生で、新入男子組には最適任の一人であつたと申し上げてよいでしょう。入学の日から、日々接することになつた杉浦先生に続き、私がお名前を覚えるようになったのは、先ずは小寺校長先生、続いては、当時現職でおられた十人余の先生方の中で唯一人、菅先生でした。受け持ちでない菅先生のお名前を、私が早くから覚えるようになったのには理由がありました。それは、菅先生が私達一年生に対しても、受け持ちの先生と同様、声を掛けるお立場におられたからです。つまり、朝礼や運動会などの折、校長先生に続いて号令台に立つてお話しされ、号令をかけておられたからです。菅先生とお聞きして目に浮かびますのは、メガホンを手に、号令台上り降りされる、白い運動服姿の先生な

のです。

それにもう一つ加えるとすれば、菅先生が大変怖そうな感じの先生だったからです。お顔付からして厳めしく、当時、私達は毎朝登校の折、校門で一礼したものでしたが、その折のお気持ちを感じた時など、幼い私にさえ厳しいお人柄を感じさせるに十分でした。

では、尾高先生についてはどうであつたかと申しますと、実は入学して暫くの間、私は確と存じ上げないまま過ごしていたのでした。ところが一年、二年と時が経つうちに、いつの間にか、メガホンを手にされるその運動服姿の先生が、菅先生ではない他の先生に代わられるようになっていたのです。

その先生は、菅先生よりは少しお若くお見受けし、身のこなしの一段と軽快な感じの方で、全力疾走される時のお姿の恰好よさは、今も目に浮かぶようです。幼い私の眼にも如何にも恰好よく映り、それでいて菅先生のように怖そうでないその方こそが、漸くその頃から、尾高先生のお名前とともに、私の意識にはつきり焼き付けられるようになったのです。

尾高先生ご自身のご記憶によれば、それは昭和十三年頃のこと、体育主任の役を、やはり菅先生から引き継がれていたということなのであります。

ところで、その頃の世の中の情勢を窺わせる、私の学校での思い出の一つ、ここでお話ししておきましょう。

それは、全校生徒に向けて掛けられた号令の一つに、「もくとう」があつたことです。幼い私は、それを「ぼくとう」と聞き違え、母親にそれを正されるまで、間違つたまま信じ込んでいたのでしたが、勿論それは黙禱のことで、幾度もその号令の掛けられたことを思い出すのです。お分かり頂けるのではないでしょうが、そのころは既に戦時下にあつたのでした。そしてその号令を掛けておられたのが菅先生か、或いは尾高先生であつたことは間違いないところです。

序ながら、その頃の我が国の状況が学校にどのような影響を及ぼし始めたか、それを示す証拠としては、先に挙げました昭和十二年の「学校通信」などが、その最も適当な一例であると申せましょう。

つまり、その冒頭の校長先生のお言葉が、四月二十九日、天長節に当たつての創刊号では、教育についてのお考えなど、いわば一般的な事業説明であつたのに対して、十一月三日、明治節発行の二号では『出征将士に贈ることば』『出征軍人御家族に贈ることば』となつて居るのです。また児童作品特輯に当たるその二号には、『兵隊さんへ』や『出征兵士』など、女子児童による戦時色露わな作文さえ見え、その年七月七日の中国でのあの事件を境に、突然、戦時体制を露わにし始めた我が国の状況が、小学校の隅々にまで暗い影を落とし始めたことを物語る証拠と言えるでしょう。

ところで、尾高先生が体育主任という役目をお持ち

であったとは、私は知らなかったのですが、先生は、実質そのお立場から、ご自分の受け持ちの組以外にも、体操の授業に限って目を配られていたように思われます。私達も、四年生の頃でしたか、確か尾高先生の体操の授業を受けたように記憶するのです。当時、先生は、私達より一年上の五年雪組を受け持っておられた筈です。

その辺りのことから、ここで私達の受け持ちの先生のことにも、触れておきますと、一年生では杉浦先生、二年生では畑先生、三年生では大村先生、五年生では堀見先生と、それぞれ一年を通して受持って頂いたのですが、四年生の時は、三年次に続き、大村先生の受け持ちで始められたのが、途中から木村、麻田両先生に代わって受持って頂くようになったのです。尾高先生による体操授業は、恐らくその四年生の時のことではなかったかと思われます。なお、校長先生は、五年生の時から、西田先生に代わられていたのです。そして昭和十七年、私達もいよいよ最終学年を迎え、太田先生受け持ちのもとで六年生の授業が始まったのです。学芸会や伊勢神宮への修学旅行など、恒例の行事も済ませたのですが、夏休みを目前に控えた七月のこと、突然太田先生は退かれ、そのあとを尾高先生が引き継がれることになったのです。

そのような異常とでもいう他ない事態に、何故、どのような経緯によって立ち至ったのか、学校としての

五六年生を担当すると、電灯をつけてまで学習をさせたり、創意工夫して、独自の受験問題集を作成したり、早朝巡校検査とあって、他の学級学年より一時間も早く登校させて、検査を中心に受験勉強をしたりして、苦勞をしました。

六年生を卒業させると一貫目や二貫目体重が減少するのが常識的でした。進学率がよいと父兄に高く評価されて、連続的に五六年の担任を要望されて、任命されるのでした。今考えると実に馬鹿げたことが平気で行われていた時代でした。昭和十四年度第一回目の卒業生を送り出して、昭和十六年度第二回、昭和十七年度第三回、昭和二十年度第四回の卒業生を送るまで、受持ちが病氣休職されたため七月から六年生を受持つことや、早朝寝込みを父兄に襲われて六年生の担任になってくれと懇望されて困ったこともありました。

以上、尾高先生の戦後のご活動にもわたるご回想の冒頭部分なのですが、今更ながらに、私達の母校の当時の在り方や、それに立ち向かわれた先生方のご苦勞の程が偲ばれるのではないのでしょうか。加えて、あの学年半ばでの突然の受け持ち交代の事実が、先生ご自身の言葉で語られており、そこには前任の同僚先生にたいする氣遣いのお氣持ちの込められていることも、見逃してはならないと思うのです。あからさまに実状を晒すことは、先生のお氣持ちに副う所以ではな

苦衷の程も察せられ、ここは尾高先生ご自身が残されているお言葉に総てを託させて頂くのが最も適當ではないかと思うのです。冒頭で申しました、尾高先生「膝下」の期間の異常な短かさとは、このような事情による結果なのでした。

以下、先生ご自身が、「三十年のあゆみ」（千里第二校、昭和三十四年十一月十五日発行 創立三十年誌）に寄せられた『回想録（雑音）』から一部分を引用させていただきますこと、どうかご了承くださいます。

「昭和十一年四月、千二校が十二学級の学校に成長した時奉職しました。児童数も五〇〇人を稍々越す程度で若々しい滲らつとした感じのする学校でした。それから昭和二十四年十一月まで十三年七月お世話になりました。三十周年史の青少年期を過したような気がしますが、その間、明かるく楽しい学校生活を続けられました。また非常に変化に富んだ数多くの思い出のある時代でした。

まず、中学進学の実験勉強の激烈さと苦勞が思い出されます。校区の事情からも想像されるように、学級児童数の九割以上の中学校進学希望者があり、その半数が府立中学校を志願する状況で、父兄の教育に対する関心は中学校進学の一点に集中していたと言えます。

いでしよう。

なおここで序に、尾高先生が持ち上がりで受持たれた年数を比較の為挙げてみますと、十三回生の場合五、六年の二年間、十一回生に至っては、実に三、四、五、六年の四年間にわたっていたとのことで、十か月にも満たぬ我々十四回生の場合の短さは際立っていたと言つてよいでしょう。

そして時は人を待たず、最長学年とはいふものの、いまだ成人に遠く至らぬ私達十四回生四十八名、敢えて新たなと申しますが、新たな担任の先生の下で、待たなしの最終学年総仕上げの段階に入ったのでした。ただ、二期の本格的な授業までには、なおひと月の夏休みが挟まるという、変則的なスタートではありましたが、その間、淡路島洲本への天保山発日帰り船旅を、愈々尾高先生直々の引率下で経験し得たことなど、今振り返れば誠に有難い、子弟間の膝を突き合わせての交わりを控えての、儀礼抜きの実りある船旅なのでした。

時は昭和十七年八月初旬、築港への道すがら、護送されるアメリカ兵捕虜の一隊に行き交うなど、町の様子にも戦時色覆い難いものがありました。天女丸、女王丸両船による、晴れた真夏の日の波静かな海の上の行き帰り、伝え聞く南方での日本軍の苦戦など信じてもよいことなのか、訝られる程の穏やかさでありました。

昭和17年秋の生駒山遠足写真

編集部注(左端ソフト帽尾高先生 前左は三笠さん・右端戦鬨帽



西田校長・その
前右は有馬さん
その左阿部さん
です)

今繰り返し思いますに、そのように頗る平穩でありました夏休みも瞬く間に過ぎ去り、いよいよ尾高先生の下で、小学校時代最後の仕上げ授業、事実上、戦時下での受験戦争が始まったのでした。

ただその中での実態として、誤解無いよう付け加えておかねばならないのですが、その当時、中学校の選抜試験は、内申書と面接口頭試問に限られ、学科試験は全く行われなかったのです。しかし、他の小学校のことは知らず、千里第二校にあっては、学科学習の縮小軽減に繋がるどころか、逆にその強化が図られたのでした。もともと、それは個々の先生によることであったのかもしれませんが、少なくとも、保護者の意向を体しての学校の考え方、そして尾高先生のお考えは、先生ご自身述べられている通りで、私達生徒一人一人が身を以て体験したとおりであります。そして、そのように導いて下さったことが、私達のその後の学力習得の基礎となつていていることを、大変有難く思わねばならないのです。

一方、体操授業の特色としては、勿論剣や鉄砲など一切抜き、いわば徒手教練の類ではありましたが、小学生の体操授業にまで兵隊教練の要素の加えられたことが思い出されます。当時の男性先生方は、どなたも兵役を終えられていたはずで、尾高先生は陸軍少尉

「国民学校になって、体操の外に武道が正科目として取上げられ、土用稽古、寒稽古等、激しい練習を積み重ねたこともありました。昭和十七年春に、大阪新聞社主催の剣道大会に参加して、ゆかりの桜井の駅公園で、府下の強豪を撫切りにして優勝しました。

記念写真 師範は剣道専任の奥田先生、当時の講堂の壇上をバックに。14柿崎さん(後列右端) 提供、左端で幟を持つのは普田さん、その右側が有馬さんです。柿崎さん以外は残念乍らすべて故人。



講堂壇上にある重々しい祭壇は四大節(新年・紀元節・天長節・明治節)の早朝校長先生が奉安殿から教育勅語を移し、式で恭しく取り出して奉読。祭壇は終戦後すぐに奉安殿と共に取り壊されました。

であられたはずです。従って、当時の軍事奨励の気運に加え、尾高先生ご自身のお考えにもよつたのではなかったかと思われるのですが、その秋の運動会での全校集団行進なども、不肖ながらその二学期、級長役を託されてしまった私の指揮、号令のもと、岡村吉純、高瀬陽二、滝内春雄の三君によるラッパ隊の、見事な軍楽吹奏をもって先導するなど、まるで本物の兵士の分列式さながらの勇ましさでありました。

なお、尾高先生はそのように軍歴をお持ちでしたが、普段は詰襟、カーキ色の所謂国民服を着用され、軍服姿をお見かけしたのは只一度ばかりであったと記憶しています。その国民服についても、他の先生方程には執着されてはいなかったようで、生駒山への遠足の時などがそうであったように、中折れ帽に背広、そして儀式の折はモーニングを着用されていた筈です。何かにつけ、行動様式の統一を喜ぶ当時の風潮のなかでの先生のそのようなお姿は、先生のお考えの一端を窺わせる証拠として興味深く思われるのではないのでしょうか。

最後にもう一つ特記されるべきことは、戦時下であっただけに、剣道の稽古が強化されたことであります。その剣道について先生は、ご自身のご記憶を、同じ『回想録』に次ぎのように記されています。

その秋産経新聞主催の大阪府剣道大会に団体戦で準優勝し、個人戦で同級生の菅田君と有馬君が優勝を競ったこと等は忘れられない印象です。」

菅田保之、有馬茂和両君の健闘振りが、尾高先生にとつてそれ程まで印象深いものであったとは、クラスのもの者としても誇らしい限りであります。そこにはもう一つ加えるべきことがあります。私が先生に代わって付け加えておきたいと思うのです。それは両君が竹刀打ち一本槍の、文の道知らずではなかったことであります。それどころか、それらの広域競技大会が、仮に学力競技であったならば、そこでも、尾高先生仕込みの学力をもって、必ず優勝していたに違いない二人であったことでもあります。文武両道、両刀遣いとは、正にこれら両君のことでありました。

そして、あれほど異常なまでに短く限られた期間に鍛えを受けた私達十四回雪組の面々が、卒業並びに進学に際して、どのような結果を以て先生にお応えしたか、さらに、その後の各人それぞれ、様々な分野での奮闘の様子など、本誌読者の皆様に限っては逐一申し上げる必要など全くないものと思えますが、先生の御目には、どのように映っていたことでしょうか。必ずや『十四回雪組の君たち一同、よくぞ闘いたり』とのひと言を頂いているに違いないと思うのは、私一人の思い上がりでありましょうか。

追記

十四回雪組の授業に当たられ、又、文中でお名前をあげた先生方の、千里第二校就任、退任の年月日を、参考の為、同校発行「三十年のあゆみ」から転記させて頂いたいただきます。但し、太田先生については、小松校長先生にお願ひし、学校保管の資料により教えて頂きました。敬称を省略させて頂きます。

菅 誠爾	昭 4 . 4 . 1	昭 16 . 3 . 31
杉浦ふさ	昭 4 . 4 . 1	昭 20 . 10 . 15
小寺治雄	昭 5 . 3 . 31	昭 16 . 3 . 31
大村正明	昭 7 . 3 . 31	昭 15 . 6 . 30
木村(山本)	昭 10 . 8 . 31	昭 23 . 3 . 31
正和		
堀見 浩	昭 10 . 9 . 6	昭 18 . 3 . 31
尾高一郎	昭 11 . 3 . 31	昭 24 . 11 . 30
畑美恵子	昭 13 . 3 . 31	昭 23 . 3 . 31
麻田晶子	昭 15 . 7 . 18	昭 20 . 3 . 31
西田慶太郎	昭 16 . 3 . 31	昭 19 . 9 . 30
太田得至	昭 16 . 8 . 31	昭 38 . 3 . 31

学校長

学校長